

日本とドイツの学生の家族形成に関する将来展望

山本 菜月*

Students' expectations regarding family formations in Japan and Germany

YAMAMOTO Natsuki

Abstrakt

Das Ziel dieses Beitrags ist es, die Tendenz der Meinungen, die Studierende in Deutschland und Japan gemeinsam haben und den Unterschied der persönlichen Zukunftserwartung der Familiengründung zu verdeutlichen, um die Wünsche der jungen Erwachsenen in einer schrumpfenden Gesellschaft zu erkennen. Das semi-strukturierte Interview, das acht deutschen Studierenden (19-34 Jahre) im Jahre 2015 und sechs japanischen Studierenden (21-25 Jahre) im Jahre 2016 durchgeführt wurde, liefert folgende Resultate: (1) Die meisten Studierende der beiden Länder wünschen sich zwei Kinder aufgrund eigener Erfahrungen in ihrer Kindheit. (2) Für weibliche Studierende vor allem in Japan ist die Vereinbarkeit von Familie und eigener Karriere für wichtig. (3) Sie haben die Sicht, dass man nach der Geburt eigener Kinder heiraten soll, obwohl die deutschen Teilnehmer tolerant sind, auch außerhalb der Ehe Kinder zu haben, im Vergleich zu den japanischen Teilnehmern. Noch immer spielt die Heirat bei der Familiengründung für Studierenden eine große Rolle.

Keywords : Family sociology, Family formation, future Expectation, Comparing Japan and Germany, University Student

1. 研究背景と目的

日本とドイツは文化的・社会的背景が異なっているが、家族や子どもに対する視点でいくつかの共通性が見られる。日本での「三歳児神話」が今でも支持されることもあるように、両国はともに政治的に家族に対して福祉の責任を負わせてきた。また、未就学児を持つ母親の就業率が低いこと、性別役割分業観が続いてきたこと、全日制の保育園の数が少ないことなど、ドイツでは主な保育資源を家庭に求めるところ（原 2003）も日本と似通っているといえる。

子どもを持つことに対しても、両国では共通点を持つ。2015年の合計特殊出生率は、日本で1.45（厚生労働省）、ドイツで1.50（Destatis）であった。両国ともに出生率は最も低かった時期から回復傾向にあるが、人口置換水準を満たすには至っておらず、超少子化国と位置付けられている。少子化の原因として出産のタイミングを遅らせる晩婚化や晩産化の影響も見られるが、両国ではそれだけでなく、そもそも子どもを持たない者の割合が増えており、高学歴者ではそれが特に増加していることを原（2009）は指摘している¹。

そこで本稿では、教育から職業への移行期にある日本とドイツの学生の家族形成に関する意識を比較し、両国の若者が自身の将来にどのような展望を持っているのかについて、捉えることを目的とする。背景が異なりつつ

キーワード：家族社会学、家族形成、将来展望、日独比較、大学生

*平成29年度生、ジェンダー学際研究専攻

も両国が少子化、または無子化が起きているとするなら、その共通の要素がどのようなことなのかについて明らかにしたい。

2. 日本とドイツにおける家族を持つことに関する先行研究

青年期が延長され、個人化が進展するとともに、若者は大人になることへの条件が不確実になっているが、立場の弱い層がより不透明で不利な選択肢を持つことになる（ファーロングら 2009）。ドイツにおいてもこうした点は顕著に表れており、MaschkeとStecher（2009）は15歳から24歳への調査から、経済的資源が低い若者は個人的により高い資源を持つ者より、悲観的な展望や不安などを持つことを明らかにした。個人化の進む若い世代は、自分の人生を自分で構築するかのように語ると伊藤（2003）はドイツでの調査から明らかにしている。またHurrelmannとQuenzel（2013）は現代ドイツの若い男性は多様なK²からなる役割の受け入れが出来ておらず、伝統的男性像に逃げ込んでいることを指摘している。

未婚者、特に若者の結婚や子どもを持つことに関するものは、例えば藤野（2005）の未婚者への研究において、結婚に肯定的で結婚規範を重要視する人ほど、子どもを持つ意欲が高いという結果や、学生の家庭像についての調査で子どもは将来2人欲しいと答える者が多いこと（進藤ら 1998）が示されており、家族を持つことに対して意欲的だといえる。既婚者への調査では、自身のきょうだい関係やきょうだい数が子どもを持つ意欲に影響を与え、出生意欲を高めることを岡村（2012）は指摘している。また、野村（1989）は旧西ドイツの若いカップルを対象にした調査において、政策や経済条件などの外的要因ではなく、個人の「エゴイズム」という内的条件が子どもを持つことに関連することを明らかにしている。

一方で従来日本では問題にされてこなかった未婚者の「子どもを持たないこと」を原（2009）は日本とドイツのデータ分析から、日本の場合は「意図せざる無子」が増加していることを指摘している。同じくドイツでも、Ruckdeschel（2007）が独身の子どもがいない人に対する分析から、ドイツの地域の東西に関係なく子どもを望む者は多く、「2人の子どもがいる家庭という通常例（‘Normalfall’ der Zwei-Kind-Familie）」を志向していることを明らかにした。結果によると、高学歴層は子どもを持ちたいとする意欲が強いが経済基盤を固めるうちに子どものことは先送りされ、諦められることも示している。また、Rost（2005）は西ドイツ地域におけるパネル調査で、夫婦の7割以上が当初希望しただけの子どもを持っていたことを示し、長期間にわたっても家族形成に関する意欲に変動は少ないことを指摘している。

それでは、結婚時点での希望する子どもの数とその実現が一致するなら、また高学歴者が結果として子どもを持たないままになるのなら、結婚する前の若者は家族形成にどのような意識を抱いているだろうか。本稿では、日本とドイツ両国の学生の将来展望に着目し、彼らにとっての家族形成がどのように語られるのかを明らかにする。

3. 研究方法

(1) 調査の概要

本調査は、2015年にドイツのノルトライン＝ヴェストファーレン州（以下NRW州）の大学に通う学生8名（男性4名／女性4名）に対して、日本では2016年に東京都内の大学に通う学生6名（男性2名／女性4名）を対象に、インタビュー形式を用いて行われた。同州は筆者の留学先であり、滞在期間中に知り合った教員や友人などの助力を得ることが出来た。調査対象者は、いずれも調査協力を求める用紙を対象大学の授業時間前後に配布し、筆者に協力可能と答えた者である。

対象者には事前に質問紙調査に回答してもらい、基本属性や将来に対しての希望などを把握してから半構造化インタビューを実施した。インタビューは1対1で行い、大学内のフリースペースや会議室、大学近隣あるいは対象者の自宅近くのカフェなど対象者の希望を尊重した上で、それぞれ1時間程度行った。

実施時の質問内容は①将来展望全般に関して、②将来の職業の希望や就職活動への関心について、③結婚することや子どもを持つことへの意識や関心について尋ねたが、対象者の語りの内容に即して尋ねる順番を変更することや質問を省略することもあった。

表1. 対象者一覧

	名前 (性別/年齢)*	結婚願望	交際経験	希望子ども数	子どもを持つことは困難か	両親職 (父/母) ³	きょうだい	住居
ドイツ	アントン (男/24)	有	有(現在)	2	ややそう思う	無職/パートタイム	有	寮・下宿
	ベアーテ (女/34)	有	有(現在)	2	ややそう思う	無職/無職	有	同棲
	カストル (男/24)	有	有(以前)	3	どちらとも言えない	—/フルタイム	有	WG**
	ドーリス (女/24)	有	有(現在)	2	どちらとも言えない	フルタイム/パートタイム	有	実家
	エレーナ (女/22)	有	有(現在)	2	どちらとも言えない	公務員/公務員	有	WG
	フリッツ (男/30)	有	有(現在)	1	ややそう思う	フルタイム/無職	有	同棲
	ゲオルグ (男/26)	有	なし	2	どちらとも言えない	フルタイム/フルタイム	有	実家
ヒルダ (女/19)	なし	有(以前)	1	どちらとも言えない	正社員/パートタイム	有	寮	
日本	イクミ (女/21)	有	有(以前)	4	ややそう思う	自営/無職	有	実家
	ジュンコ (女/23)	有	有(現在)	1	あまりそう思わない	正社員/正社員	有	実家
	カエ (女/21)	有	なし	1	そう思う	正社員/無職	無	家族同居
	リク (男/25)	なし	有(以前)	0	どちらとも言えない	自営/パート	有	実家
	マサト (男/23)	有	有(以前)	2	ややそう思う	正社員/パート	有	寮・下宿
	ナオコ (女/21)	有	有(現在)	3	ややそう思う	正社員/正社員	有	寮・下宿

*名前は全て仮名で、調査順にアルファベットの頭文字を割り当てた

**WG=Wohngemeinschaft (住居共同体) ルームシェア

(2) 対象者の概要

本稿の対象者は一覧(表1)に示したとおりである。以下に示す通り、本稿の対象者は結婚願望や子どもを持つ意欲の強い者が多く、対象に偏りが見られることは否めない。ドイツでは19歳から34歳と年齢の幅が広い一方で、日本では21歳から25歳と大学に在学する学生の標準的な年齢に留まっている。制度としての結婚を望まない学生は両国に一人ずつで、子どもを望まない学生は日本の一人だけであった。ドイツでは約4人に1人の子どもが一人っ子であるというデータがあり(BMFSFJ 2015)、一人っ子が多いことが想定されたが、きょうだいのいない学生は、今回の対象者では日本の一人だけである。自身の人生で子どもは2人以上欲しいと考える学生が両国ともに半数以上を占めていた。子どもを将来実際に持つことに困難は起きるかという想定について、「あまり困難はない」と回答する学生は日本での一人だけであるが、ドイツでは半数以上が「どちらとも言えない」と答えた。

本稿のドイツ学生の両親のうち、(年金受給者や専業主婦を含めての)無職は2人で残りの者は何らかの職に就いている。日本でも無職の母親は2人となっている。ドイツでは調査をした州であるNRW州出身者や旧西ドイツ州出身者のみであったが、実家を出ている者が大半で、パートナーと同棲している学生も2人いた。日本は都内やその近隣の出身者が多く、実家住まいまたは家族と同居している者が多く、離家しているのは2人である。

(3) 分析方法

分析は現象や事例、概念同士を継続的比較(フリック 2002; 佐藤 2008)することでコード化して行った。テキスト化されたインタビューデータや概念、コード間を常に比較し、結果の妥当性を図った。本稿ではインタビュー内容をICレコーダーに録音し、文章化した語りのデータから、特に家族形成と子どもについて対象者が語った部分を取り上げることにする。ドイツでのインタビューに関しては、ドイツ語で行った。筆者が和訳を行った後に本学のドイツ語担当教員に訳文を検討してもらうことで、結果の妥当性を図っている。

4. 結果と考察

(1) 「偶然パートナーを見つける」という文脈の差

自身の育った定位家族を離れて自分の家族を持つには、パートナーに出会うことがその第一歩となる。今回の対象者の中で交際経験のない人は両国ともに1人ずつであり、多くは交際経験を持っており、パートナーと出会

うことについての経験を持っているといえる。両国ともに、どこでパートナーに出会うのかは友人や学校・会社など自身の所属するコミュニティや集団の中で偶然 (Zufall / spontan) に出会うだろうと想定していた。

ただし、属している集団から離れての見知らぬ人と出会うことへの姿勢は大きく異なっている。例えば以下に挙げるように、ドイツでは知らない人と出会うことへの抵抗は少なく、肯定する者もいた。

エレナ：(今の彼はディスコで会ったが) 全く探していたわけではなくて、単に偶然。(だから次も) おそらくクラブかインターネットで。

筆者：ドイツでは普通のことですか。

エレナ：ええ、母親もネットでパートナーを見つけたから。

彼女の場合は、自身の母親と母親の現在のパートナーの出会いがインターネット経由であり、自身もそのような方法でのパートナーを探すことに肯定的であった。エレナによれば、ドイツではオンラインデートのサイトを利用することは年齢を問わず普通であるという。BlossfeldとSchmitz (2011) によれば、ドイツではオンラインデートの市場規模は1億3800万ユーロにのぼり、拡大を続けていることを指摘している。石井クンツ (2010) はアメリカでは交際相手探しを気軽に行なっており、また交際そのものが即座に結婚とは結びつかないことを指摘している。石井クンツは同様にオンラインデートについても指摘しており、アメリカでのパートナー探しに大きな影響を与えているという。他方で、オンラインデートはその利用者間での問題が犯罪に発展することもあり、いまだにスティグマを拭いきれないものではある。しかしドイツをはじめ欧米では利用者が増加し、また社会科学的な研究対象としても扱われるなど、学術的にも社会的にも肯定的な捉え方がなされていることが彼女の語りから推測できる。

ドイツでは自分と接点のない人間との出会いを許容する一方で、日本ではそうした行動、特にお見合いや主体的に出会いを求める行動を「婚活」と呼び、そうした行動はとりたくないとする者が多かった。

ジュンコ：(パートナーを探すなら) まずは身近なところで。じゃないですかね。あんまりそんな婚活パーティーとかには、行かない、まあ最終的な手段ですよ、多分。まだ学生とかだったら、出会いいっぱいあると思うし。でも社会人になったら、なかなか。ないでしょうね。なかなか社内恋愛できないだろうし。そしたらたぶん、そういった婚活パーティーとか、の方がいいんじゃないって思うけど。

リクは今回の日本の対象者では唯一法律的な結婚を望まないとしていたが、恋人を探すにしても、内定先の先輩社員から「ほんとに女性がない」という会社の内情を教えてもらい、理系の職場で働くことになる自分は「職場で(パートナーが)見つかることはほとんどないだろうな」と思い、職縁による出会いをすでに諦めていた。工業や建築分野の職場では社員の男女比から、出会いがないことはドイツでもあり、エンジニアとしても働くフリーツも社内での出会いは不可能であると語っている。

また、「婚活」という言葉はインタビュー内で複数回出てきた言葉ではあったが、ジュンコの言うような「最終的な手段」だけではなく、「ザ・婚活(カエ)」と言って揶揄するように、出会いの場の選択肢としてあまり採用したくないという意識が伺えた。ドイツの学生にとっての積極性は知り合いを通じて紹介されることや、自身の環境の中だけでないことが示唆される。また一方で日本の学生はパートナーを意識して探すことを避けていた。ここから、両国ともに学生は交際相手、ひいては自身のパートナーを「偶然」によって見つけようとはしていたが、その偶然性の意図するところには差のあることが分かった。

(2) 子どもに関する語り

本調査ではほとんどの学生が子どもを持ちたいと考えていた。特にきょうだいのいる学生は自身の条件が合えば2人は子どもが欲しいとしており、その理由として自分にきょうだいがいることを挙げた。

イクミ：人のいない家みたいなのが慣れていなくて。まあ私自身、上も下もたくさんいて、楽しかったなと思うので、もし家庭を築いて、自分の子どもを産んだとして、そういった思いは味わってほしくないなって思いますね。

エレナ：きょうだいがいるから、きょうだいがいたらとてもいいことだと思う。だから、もし(自分の子に) 弟か妹がいたら、それは素敵なことと思う。

「5人姉妹の4番目」であるイクミは、自身の家族との経験から自分も子どもを多くほしいと考えているという。実際、きょうだいが多い場合は希望子ども数も増える傾向にあった。3人きょうだいだというジュンコは、「お金のことを考えれば全然一人の方がいい」ため1人だけ産みたいと考えていたが、社会性やパートナーの希望も考えて実際は2～3人子どもを持つことになるだろうと答えた。また、フリッツもジュンコ同様に1人の子どもがいいということだったが、「1人しか子どもを持たないなら、親はいつも子どもに集中」することを避けるために、現実には一人っ子は「よくない (blöd)」⁴と親の視点からきょうだいがいた方がよいとする理由を口にした。

日本では子どもを2人以上欲しいとする理由を子どもの視点から語る。ナオコは自分の人生の中でなるべく早く子どもが欲しいと思っていたが、1人は難しそうだと語る理由を「全部、持ち物が自分のものだから、わがままになるんじゃないかな」と自分の子どもの育ち方への懸念を示している。

他方で、子どもが多ければ多いほどいいと両国の学生は考えているわけではない。経済的理由から彼らは実際に持つ子どもの数は自分の望み通りにはならないだろうとしていた。マサトはきょうだいの多い家庭で育ったが、「子どもに来るリソースが、一人っ子だと、全部じゃないですか。でも4人だと4分割されるわけですよ」と語り、多すぎる子どもも親である自分だけでなく子どもにとってもよいことはないだろうとの見解を示していた。彼の語りには自分のあまり幸せではない経験を子どもにはさせたくないという意味も含まれている。

子どもが欲しいかどうかについては、ジュンコやナオコのように子どもの社会性やきょうだいがいることのメリットも当然考慮されていたが、両国のインタビューデータを比較すると、日本の方が経済的な観点や子どもの視点など「外的な要因」からX人の子どもが欲しいと語り、ドイツでは自分の事情など「内的な要因」によってY人の子どもを望む傾向が見られた。例えば2人ほしいとするベアーテは自分の想定を述べた。

ベアーテ：子どもにきょうだいがいることは素敵だって思っているのよ。本当に素敵だって。はっきりと2人子どもが欲しいと思うけれど、でも想像してみると、OK、一人、もう十分って。

ここではきょうだいがいた方がよいというある種の規範や自分の理想と子育てや生活などの現実と板挟みになっているがゆえの不安も見受けられる。彼女のように、現実を踏まえると子どもが支障になる可能性について語る学生は多く、日本では特に職業との両立への不安などを訴える女子学生が多かった。

カエ：子どもがいたとして、でもやっぱり自分仕事辞めたくないってなっちゃうと、割とほったらかしになっちゃうじゃないですか。それはかわいそうだなっていうのと、まあ実際問題、まあもしその子どもがいたから仕事辞めて再就職ってなると、難しいだろうし。

イクミ：寿退社って最近あんまりないと思うんですけども。まあ子どもがもしできたとしたら。じゃあその時自分がいったん、キャリアが。どうやっても途切れるわけですからどういう形であっても。それでどう復活したいのか、とか思ったり。

筆者は今回家族形成だけでなく、就職活動など他の領域についての将来展望なども尋ねたが、日本の女子学生は職業展望について語る際も育児休業や保証がしっかりしているかといった企業の福利厚生を家族形成に必要な要素と関連付けて語り、日本の性別役割分業の強固さとそれに対するジレンマがうかがえた。また、子どもと自分を天秤にかける際、日本では子どもがいるとキャリアが途切れる、仕事をすると子どもがかわいそう、と子どもを優先する態度をとるのに対して、ドイツでは葛藤の結果、自分のことを考えている姿勢が現れていた。

男性は出産を行なうのは自分ではないため、子どもを持つことについては女性よりも抽象的な語りの展開だったが、自分のことではないからこそ、パートナーの望みを考慮する必要性を感じていた。例えば子どもを3人持ちたいと考えるカストルは「妻が同じ想定を持っていないければいけないよね。つまり3人子どもが欲しいって」と語り、マサトも「相手のあること」と、家族形成を本人の希望だけで行わない・行なえないことを表している。

女性も子どもを持つことに関しての願望は「自分だけの考え (ジュンコ)」としており、ジュンコ自身は交際中のパートナーと志向のずれている点をお互いに言うようにしていると教えてくれた。こうしたことから、家族形成には本人の希望はもちろん、家族成員の合意を必要とする様子がうかがわれた。

このように子どもが欲しいかどうかは、個人の望みだけでなく、パートナーの意思も尊重する様子が学生たちの語りから得られた。子どもが何人ほしいかに関しては、両国ともに2人を望むという結果が得られた。自身の育った環境、特に自分にきょうだいがいたかが家族形成への希望に大きく働く点は先行研究 (岡村 2012) においても明らかにされており、本稿の対象者においても当てはまった。

他方で、一人っ子だとわがままに育つ可能性があるために、2人以上必要だとしており、「子ども2人」を希望するというよりも、「子ども1人」を忌避し、日本では特に、多くの子どもを持つことについても、よりよい環境で育てたいという理由で考慮に入れていないことが推察された。また日本の女子学生の場合は子どもを持つことが自分の人生を左右することを認識しており、「子どもは女性の領域」というドイツでの3Kを象徴するような語りが行なわれた。

(3) 結婚と子どもを持つこととの関連

結婚することと子どもを持つことは、かつては特に女性のライフコースと密接に結びついていた。しかしライフコースの個人化が進む今日では、結婚するかしないか、子どもを持つか持たないかは個人の選択に委ねられている。結婚したい日本の学生は、全員が一定年齢までに結婚したいと考えていた。

イクミ：まあ20代がいいのかなって思いますね。さっきも言ったように、私はなんか、子どもを、子どものいる家庭を築きたいなって思うので。そしたらまあその前に、結婚っていう形をとるとしたら、その前に、結婚したいのかなって思いますね。

前節でも見たように、イクミは可能ならば子どもがたくさんいる家庭を持つことを望んでいる。そのためには30歳になる前に、結婚する必要がある。また、ナオコも30歳を結婚のタイミングとしていた。

ナオコ：30歳までに結婚して、出産も、30になる前に第1子を生みたいと思います。

筆者：それはどうしてですか。

ナオコ：母親に言われたんです。その、30を過ぎたら（出産は）たいへんなのよって。

母親がナオコを産んだのは周りと比べて比較的早い年であったと彼女は言う。若い時期の出産の方が負担も少ないし、子の成人と自分の定年が同時に来るのはたいへんそうなので、自分も早く子どもを持つべきだと考えていた。高齢出産のリスクに言及したのは女子学生だけではなくた。マサトもはっきりと年を取ってから子どもを持つことに危惧を感じていた。

マサト：あんまり年取ってから子どもを産むと、問題が生じやすいじゃないですか。それが心配なんで。でもあんまり若すぎると、子どもの生育過程にちょっと響くかなって。まあ30ぐらいかなって。

年を取ってから子どもを持つのは子どもの身体に影響が出る可能性が、またあまり早くに親になることは自分の経済状況を考えても不安になるので、彼は「できるならいい環境で育ててあげたい」と語った。このように、日本の学生の場合、結婚したい年齢というものを自ら設定していたが、それは子どものためということが見てとれる。

ドイツの学生は、日本とは異なり年齢で区切って結婚するのではなく、理想的な相手を見つけるまでは結婚しなくてもよいと考えていた。もっとも、いつまでも独身でいても構わないというものではなく、可能であれば結婚したい時期を決めていた。

アントン：30から35までに。それは家族を持つにはいい年齢だから。他にも、それ以降でパートナーを見つけることは難しいだろうと思うから。

彼の語りからは「それ以降」の結婚の難しさを予想していることが表れていた。また、ヒルダも30代で結婚することを理想としていた。

ヒルダ：30歳前がいい。あるいは30歳ぐらいも。だいたい（結婚するのに）。というのも卒業して、少し働いて、青春を楽しむ時間もたくさんあるだろうから。それから、ちょうど積み上げは始めるのにいいだろうから。

彼女は事前調査では法律婚を望まないとしていたが、特定の相手とパートナー関係を持つこと、子どもを持つことを拒否してはいなかった。彼女の語りからは勉強や職業など家族形成前の時間を謳歌し、自分にとって最適なタイミングを見計らって家族を持ちたいとしており、子どもを持つことは結婚の理由にはならないとしていることが分かる。ヒルダより一回り年上のベアータは結婚と年齢は明確に結びつかないとしている。

ベアータ：特定の年齢は本当に考えていないの。私は結婚したいとは思いますが、それは必ずしもしなくてもよいものだから。必ずしも結婚しなくてもいいの。今、私が子どもを持っていたとしたら、結婚したいとだけは想像できる。

彼女にとって、結婚に必要な要素は子どもがいるかどうかだけであった。それも、日本のように「結婚してか

ら子どもを持つ」という流れに則ったものではなく、子どもがいるから結婚するという意味付けがなされていた。ベアーテはパートナーと既に共同生活をしており、相手も自分も仕事を持っている。こうした二人の間には、子どもという要素がないと結婚に踏み出す理由が存在していないことが推察された。

日本の学生の場合、マサトが結婚したい理由として、「結婚して、まあ結果として子どもが生まれるんじゃないくて、子どもが欲しいから、結婚する」と言うように子どもを理由にして結婚したい、また子どもを持つには必ず結婚しなければならないとしていたが、ドイツの学生は結婚と子どもの間には順序だった規則が見られなかった。そのことをドーリスの語りが示している。ドーリスは自分の今後を考えるモデルとして彼女のおじを挙げていたが、その理由はおじが子どもを持ってから結婚するなど自分の人生で想定外のことが起きても対処しているからだと言う。そのため彼女自身も自分の将来についてこう語る。

ドーリス：もちろん順番どおりじゃないこともある、おじみたいに。彼は最初に子どもを持ってから結婚したし。(うまくいくかどうかは、) 見てみないと分からない。

彼女にとっては結婚してから子どもを持つことが「順番」であることが自明視されている。その一方で、自分の思い描く順番通りに物事が進まない可能性も考え、それを許容している。確かに家族形成に際して子どもを持つことと結婚することのうちどちらが先かは、日本に比してドイツでは自由であることがベアーテやドーリスの語りから読み取ることが出来る。しかし彼女たちの発言は結局のところ、いつかは「結婚しなくてはいけない」という意識の表れとも考えられる。

ドイツにおける結婚の重要性は、ヒルダの発言に示されている。彼女は恋愛と結婚との違いをどう考えているか以下のように述べた。

ヒルダ：結婚は、よりしっかりと互いを結び付けるものだから。そんなに簡単にやめるわけにはいかない。結婚はいくらか契約でもある。少なくとも約束、大きな約束のこと。恋愛はそんなに本物じゃない。だから、結婚は恋愛のアップグレードをいうの。

離婚には裁判を経なければならず、結婚は役所で手続きを踏まなければならないため、ドイツでは簡単に結婚することはできないことを彼女の語りは表している。また、フリッツも同様に「結婚は何かいつも形式的で、なんか正式で、ちょっと身軽さや緩さを失くすものだから」と、結婚を複雑な制度として捉える様子が見えたと。

以上のことから、ドイツにおいて結婚は家族形成にとって重要なものであることが示された。日本の学生が結婚してから子どもを持たなければならない、と順序にこだわるのに対して、ドイツにおいてそれはどちらかと言えば子どもを持つか持たないか同様に個人の自由であることが示されている。しかし、彼らは自分たちの人生の中で結婚することと親になることのどちらも自明視している。人生の中で自分の家族を持つ際にこうした要素を当たり前とすることが両国に共通している特徴と言える。

5. まとめと今後の課題

日本とドイツの学生が将来展望に関してどのような共通した、または相違した意識を持っているかを本稿では家族形成に焦点を当てて検討した。パートナーを持つ、子どもを持つことへの考え方について、両国では相違点もあるがいくつかの共通した特徴を得られた。

パートナーを見つけることについては、両国ともに自然にいつの間にか出会うことを期待はしていたが、偶然の定義に差が見られた。ドイツでは自ら相手を見つけに行く積極性が、クラブに行くことやオンラインサイトに登録するなどの行為によって表れていたが、日本ではそうした行動を避けて自分の行動範囲内で出会いが見つかることを期待していた。

多くの学生は子どもを2人ほしいと自分にきょうだいがいたことなどを理由に挙げていた。その一方で、一人っ子になることは子どもにとって好ましくない要素があり、きょうだい数が多いことも子どもにとって悪影響を及ぼすことが考えられるために「2人前後」という結論を下していることが推察された。

伊藤(2003)が示した生活史を構築する方法のように、ドイツ学生は自分を主体として結婚や子どもを望む理由を語っていた。また、野村(1989)のいう個人の「エゴイズム」という単語で子どもを持つか持たないかの願望を述べていたように、ドイツ学生は内的な要素が将来展望を語る上で重要な要素になっていた。日本の学生も

自分の家庭環境や経験から自身の希望を語っていたが、「子どもがかわいそう」、「子どものため」など自分ではなく子どものことを優先した、妥協のような将来展望を語っていた点が特徴的だった。

本稿の調査対象者の多くがいつかは結婚したいと考えており、結婚したい時期を持っていた。日本では特に男女ともに子どもを持つのに適した年齢というのがその区切りとなっていた。婚外出生は日本でも上昇傾向にあるとはいえ、欧米に比べて少ない。子どもが欲しいなら結婚しなくてはならないという意識や、パートナーを見つける機会を狭めることや、女子学生にとっては子どもを持っても働き続ける環境の少なさが、子どもを持つことの先延ばしや、結果としての「意図せざる無子」(原 2009)につながる事が考えられる。

他方ドイツも、北欧などと比較すれば婚外出生の割合は低い方であるが、戦後その割合は緩やかに上昇している。今日、ドイツ全体では34.5%の子どもが結婚していないカップルから生まれている。その一方で、子どもが生まれた後で結婚するカップルも多く、また結婚したカップルの方が第二子以降を持つ可能性が高いことがデータから見られるという (Destatis Hrsg. 2016)。子どもと結婚は現在でも一定の結びつきを持っていることが考えられ、本稿の語りでも学生はいずれ結婚することを自明視していた。

今回、旧東ドイツ地域や当該地域出身者にアプローチできず、地域性の検討を行えないことは、本稿の限界の一つだが、結婚すること、子どもを持つことなど家族形成に対する意識の硬直性が両国に共通している家族を持つに際してのハードルになっていることが推察される。他にも、時間的制約などにより、対象者の数が少なかったこと、また結婚や子どもを持つことに否定的な学生へのインタビューがあまり行われなかった。今後はこうした対象者にアプローチするとともに、さらなる理論的な検討も含めて課題としたい。

【註】

- 1 日本男性はドイツ人や日本女性ほどではないが、高学歴層の有配偶者は無子になることが多い。ただし日本では未婚無子も考慮に入れなければならないため、ドイツほど明確に学歴と無子に関連があるとも言い難い。
- 2 ドイツではよく女性の居場所として3つのK (子ども=Kinder, 台所=Küche, 教会=Kirche) が挙げられるが、近年ではそれ以外にキャリア=Karriereも追加されている。
- 3 ドイツでの事前調査時、「フルタイム (Angestellter/in)」「パートタイム (Teilzeit)」と表現を分けて回答を求めた。パートタイマーであっても正規職と変わらないことが多いため、日本のように「正社員」とは表記していない。
- 4 blödの意味は本来「ばかばかしい」だが、「子ども一人」に対して負の印象を抱いていると捉えて訳した。

【参考文献】

- Bundesministerium für Familie, Senioren, Frauen und Jugend (BMFSFJ) (2015) *Familienreport 2014 Leistungen, Wirkungen, Trends*.
<https://www.bmfsfj.de/blob/93784/e1e3be71bd501521ba2c2a3da2dca8bc/familienreport-2014-data.pdf> (2017年8月30日アクセス)
- Blossfeld, H., Schmitz, A. (2011) Online dating: social and a tool for research on partnership formation, *Zeitschrift für Familienforschung*, 23 Jahrg., Heft 3/2011, 263-266.
- フリック, U. (2002) 『質的研究入門 <人間の科学>のための方法論』小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳、春秋社。
- 藤野敦子 (2005) 「未婚男女の子どもを持つ意欲—その実態と決定要因—」『研究年報』第10巻、85-94。
- ファーロング, A., カートメル, F. (2009) 『若者と社会変容 リスク社会を生きる』乾彰夫、西村貴之、平塚真樹、丸井妙子訳、大月書店。厚生労働省 <http://www.mhlw.go.jp/> (2017年8月30日アクセス)
- 原俊彦 (2003) 「ドイツ—オランダ語圏諸国の低出生率と家族政策」『人口問題研究』59巻1号、81-98。
- (2009) 「無子の増加—日本とドイツの比較—」『札幌市立大学研究論文集』3巻1号、5-18。
- Hurrelmann, K., Quenzel, G. (2012) *Lebensphase Jugend. Eine Einführung in die sozialwissenschaftliche Jugendforschung* 12. Auflage, BELTZ JUVENTA, Weinheim und Basel.
- 石井クンツ昌子 (2010) 「アメリカ社会から見た現代日本の「婚活」」山田昌弘編『婚活現象の社会学：日本の配偶者選択のいま』東洋経済新報社、187-224。
- 伊藤美登里 (2003) 『共同の時間と自分の時間—生活史に見る時間意識の日独比較—』文化書房博文社。
- Maschke, S., Stecher, L. (2009) Perspektiven von Jugendlichen auf die gesellschaftliche und persönliche Zukunft, *Diskurs*

- Kindheits- und Jugendforschung*, Heft 2-2009, 153-171.
- 守泉理恵 (2007) 「先進諸国の出生率をめぐる国際的動向」『海外社会保障研究』160号、4-21.
- 野村明代 (1989) 「子供を持つ・持たないの選択に関する意思決定—西ドイツの若いカップルに対するインタビュー調査をもとに—」『お茶の水女子大学人間文化研究年報』、13号、215-229.
- 岡村利恵 (2012) 「子ども数の選好の具体化とその変化に関する質的研究」『生活社会科学研究』第19巻、35-43.
- Rost, H. (2005) Kinder – Wunsch und Wirklichkeit, *Zeitschrift für Familienforschung*, 17. Jahrg., Heft1/2005, 8-20.
- Ruckdeschel, K. (2007) Der Kinderwunsch von Kinderlosen, *Zeitschrift für Familienforschung*, 19. Jahrg., Heft2, 210-230.
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社.
- 進藤啓子・坂口りつ子・山本マチ子・上村潤子・糸静子 (1998) 「学生の意識調査に見る家庭像—学生の関心事およびライフコース—」『人間関係学研究』第5巻第1号、41-52.
- Statistisches Bundesamt (Destatis) <https://www.destatis.de/DE/Startseite.html> (2017年8月30日アクセス)
- Statistisches Bundesamt, Wissenschaftszentrum Berlin für Sozialforschung Hrsg. (2016) *Datenreport 2016* : <http://www.bpb.de/nachschlagen/datenreport-2016/> (2017年8月30日アクセス)
- 山本菜月 (2017) 「男女大学生の子ども願望を中心とした将来像：日独比較を通して」お茶の水女子大学 平成28年度修士論文.

【謝辞】

調査に協力くださいました皆様に感謝いたします。また、本論文のドイツ語要旨やインタビュー訳の確認をなされたお茶の水女子大学教員である前田佳一助教と筆者の友人Benediktに御礼申し上げます。